

永井龍男全集

第十二卷

永井龍男
全集 十一

講談社

雜文集Ⅲ



永井龍男全集 第十一卷

昭和五十七年二月二十日 第一刷発行

著者 永井龍男

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二

郵便番号 一一二

電話 東京〇三〇九四五一二二二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

定価 四二〇〇円

装幀 原 弘

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

著者・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tatsuo Nagai 1982, Printed in Japan

目 次

I

終焉の菊池寛	13
菊池 寛	31
三月七日	34
直木三十五	40
芥川龍之介	43
横光氏の忌日	46
誠実の人	49
倒 影	52
宇野浩二	59
佐佐木茂索さんのこと	62
久米さんと旅	76

書きかけの手紙	78
止まっている時計	82
高田保さんのこと	105
吊りしのぶ	108
蚊	113
同町内の人々	117
大佛さんのこと	122
夕　　蟬	127
チェホフ叔父さん	136
「晩菊」の作者	140
九蔵の団蔵	143
夕　　立	145

中山義秀を偲ぶ	155
ある同窓会	162
見えるということ	177
円 熟	182
久生十蘭	185
「天草日記」なぞ	188
聡明ということ	191
墓 碑 銘	194
ボールがしたい	196
枯木ということ	200
中原中也	214
吉田君と子息	217

便利ちようほうなケンゾウ・ナイフ……………221

へっぽこ先生……………225

銀座の少年劉生……………229

大東京繁昌記……………232

Ⅱ

十日の菊……………237

一ト匙の砂糖……………243

クリスマス・イヴ……………247

病床からの手紙……………251

銀座の柳……………254

袴の縞目……………258

かまくら句会……………261

おもかげ……………264

「銭形平次」誕生のころ……………267

村松梢風……………269

小野佐世男……………272

古川緑波……………275

横山兄弟のベレー帽……………278

酒徒交伝……………281

Ⅲ

里見さんの家……………323

近作「俳人仲間」……………326

別冊付録のこと	330
大黒柱	332
やるまいぞ	333
引越しのこと	337
黒いソフト	347
小笠原諸島	350
今日出海における人間の研究	354
眼鏡の人	358
ある最初	360
重量上げ	363
井上靖氏への返事	367
東京人	369

心の用意	372
------	-----

IV

芸について〈対談〉小林秀雄Ⅱ永井龍男	377
--------------------	-----

文学・閑話休題〈対談〉井伏鱒二Ⅱ永井龍男	388
----------------------	-----

あとがき	415
------	-----

解題	423
----	-----

永井龍男全集

第十一卷

終焉の菊池寛

菊池寛は、昭和二十三年の三月六日に還暦を迎えました。戦後の二十三年といえはなほだしい物資不足時代でしたが、ごく内輪の方たちでお祝いをなさいました。還暦だとか古稀だとかそんなことは一向無関心な人でしたから、御家族とか、近親の人が集まってお祝いをしたのでしょうが、その夕食が済んで、九時頃二階の自室へ上がられたとたんに、狭心症で亡くなられました。十五分位の間のことだったと聞いております。歿後、いつ頃書かれたものか、筐底から遺書が発見されました。若い頃から心臓に危惧を持っておられたので、このことあるを予期されていたのでしょうか。

「私はさせる才分無くして文名を成し、一生を大過なく暮しました。多幸だったと思います。

死去に際し、知友及び多年の読者各位に厚く御礼申します。ただ皇国の隆昌を祈るのみ。吉月吉日」

というのが、その全文であります。ご存命なら今年は三十年忌ですから九十歳になられるわけです。私が、最初に菊池さんにお目にかかったのは『文藝春秋』が始まる前年か、前々年かでした。当時は菊池さんが三十半ば、私は十代の末のことでした。

『文藝春秋』の創刊号は、大正十二年の一月号です。本文が二十八頁、全冊八ボの四段組で表紙に目次が印刷してあり、定価は十銭でした。たばこのバツが、たしか五銭の頃ですから、まことに不思議な雑誌が生まれたわけです。部数は三千部でしたが、たいへん好評で売り切れてしまいました。

ご承知のように、大正十二年の九月に関東大震災が起りました。『文藝春秋』の九月号は、すでに出来上がって印刷所に積んであったそうですが、そのまま焼けてしまいました。関東大震災では六万人以上の人が亡くなり、四万人以上が行方不明になるといふ、それにつれて一時的に世の中が大変混乱したときでありました。菊池さんは、「こういう非常時に際し、文学とか小説とかいうものは、まったく無力で何の役にも立たない。自分は四国に帰って百姓になる」という感想を、当時の新聞に書かれました。これがまた当時の文壇でたいへん問題になりまして、論争が起りました。あれこれしているうちに、久米正雄、芥川龍之介などの友人たちが菊池さんをなだめる。さらに横光利一とか川端康成とか、菊池さんに私淑した若い人たちが、『文藝春秋』の再刊をしきりに希望しましたので、菊池さんもそれに従うことになりました。十月号は休刊して、十一月号を十月・十一月合併特別号ということにしました。百二十六頁でしたが、いままでの二十八頁に比べると、たいへん厚い雑誌になりました。定価はたしか二十銭だと思えますが、それを一万部刷った。これが幸い売り切れただけでなく、その次の十二月号も好評、それ以来月ごとに部数が増えてゆき、大正十五年には十一万部という大部数を刷っております。総合雑誌は『中央公論』が中心で伝統的な重さを持ち、この創作欄に小説が載れば、作家として認められたことになりました。特に新年特別号は文壇の檜舞台と云ってよかった。『改造』や『解放』がやがて出てきましたが、せいぜい印刷部数は五万部くらいではなかったかと思えますから、『文藝春秋』の十一万というのは大きな反響を呼びました。総合雑誌ということになると、当時の法律で内務省に保証金というものを納め、その資格を取らなければならないことになっておりました。総合雑誌の資格を得ますとはじめて、政治や社会問題について、自由に論評することができ、そういう法律がありました。『文藝春秋』も保証金を納めて、総合雑誌に入ったわけですが、それにしても最初千部刷っていた『文藝春秋』がその後三年か四年で十一万部という大部数になったのは、何の力だろうということになるわけです。

小林秀雄はたいへん菊池寛が好きで、尊敬しておりました。菊池寛論その他、その人物と作品について四